かさおか

発行所
天理教笠岡大教会
かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
（0865）
電話 66−1311
FAX 66−1314

稲 倉 分 教 会

昭和２年２月２日　設立
平成11年３月６日　鎮座祭
平成11年３月７日　神殿建築奉告祭

本年の活動目標

立教185年 8月号

「おぢばがえり」

・「喜びいっぱいのおたすけ」を目指し、さあ、おぢばに帰ろう 。
・「人だすけのおぢばがえり」を通して、ぢば一つに心を寄せよう。

こかん様に続く会 開催

女子青年

笠岡女子青年（山野奈々委員長）は、6月5日、笠岡大教会でこかん様に続く会を開催、女子青年18人、担当者9人の計27人が参加した。

支部長様からのお話では、絵本『世界は1つの生命からはじまった』の内容を基にして、元の理についてわかりやすく教えていただきました。その中で、〝朝起き・正直・働き〟を守って毎日を健康に過ごし、自分に与えられた役割を全うする〝細胞〟のように、「自分にできることを人のために」という気持ちで行動することが陽気ぐらしにつながるのだとお聞かせくださいました。

お話の後には、振り返りとゲームを行い、笑いの絶えない楽しい時間を過ごすことができました。

また、担当の奥様方が豪華なお弁当を作って下さり、各自持ち帰っておいしくいただきました。

今回は午前中のみの開催となりましたが、たくさんの方が参加してくださり、充実した会にすることができました。

支部長様をはじめ、担当の奥様方、声をかけてくださった方、参加してくださった会員さん、本当にありがとうございました。

（女子青年副委員長　岡﨑真実）

支部長様のお話の振り返り

支部長様を囲んでギャルピース

笠岡ワールドブラザーズ 全教野球大会 出場権 獲得

笠岡ワールドブラザーズ（福島大介監督）は、7月24日、全教野球大会岡山予選に臨み、笠岡市営球場で、3支部合同チームと試合を行った。

ゲームは、序盤こそ点を取り合ったが、両チーム好プレーが続き、4回以降は2対2のまま、スコアが動かず、ついには、延長タイブレークにもつれた。タイブレークで、2点を取られるものの、繋ぎの野球で、3点を取り返しサヨナラ勝ちを収めた。これにより、笠岡ワールドブラザーズは、全教野球大会の出場権を獲得した。

（笠岡WB　上原繁次）

延長タイブレークを制し笑顔のナイン

試合前でもリラックス

むつみ鼓笛隊 金賞受賞！

夏休み期間中の土日、おぢばでは、「特別企画鼓笛御供演奏、オンパレード」が開催され、笠岡むつみ鼓笛隊（責任者・上原繁次）は、８月６日に、御供演奏とオンパレードに出演した。

過去２年間、こどもおぢばがえりの中止に伴い、夏の鼓笛行事も中止となっていた事から、３年振りの出演となった。同隊では、「行事中止により出演できなかった卒業生の分も頑張ろう」を、合言葉に、４月より練習に励んできた。

当日は、朝から大変暑い日となったが、御供演奏では、テーマソング『ありがとう夏のおぢば』を、他の２隊と供に、心を合わせて演奏演技した。

２人で掴んだ優秀演技賞

その後のオンパレードでは、幾度となく練習を積み重ねてきた、『Sea Loves You』を、おぢばの空に響かせた。結果、見事に金賞を掴み取り、隊員、スタッフらは、喜びの涙に包まれた。また、ポンポンの部では、小学校１年生２人だけだったにも関わらず、優秀演技賞を受賞するという快挙を達成した。（笠岡むつみ鼓笛隊 責任者　上原繁次）

３年振りの集合写真

みんなの思いを乗せての演奏・演技

大教会だより

＝人事＝

立教185年7月21日付

（＊印は、本部から、または過日に発令。・印は辞令はない。）

会長室

室長　上原愛美
室員　上原志郎
〃　岡﨑真一
〃　今川昌彦
〃　上原喜三

接待掛

主任　岡﨑和美
掛員　門脇加津
〃　吉岡八恵
〃　山野なつ
〃　田中つかさ
〃　上原千枝子
〃　今川直子
〃　森本ひふみ
〃　桑田恵美子

神事部

部長　岡﨑真一
副部長　今川昌彦
部員　上原志郎

〃　上原浩
〃　田林久嗣
〃　高木昭祥
〃　岡﨑輝彦
〃　淺野明教
〃　内海史郎
〃　今川佐智子
〃　上原順子
〃　谷内秀自
〃　岡本善一
〃　西村靖彦
〃　雑賀元生

＊雅鶯会
楽長　田中隆之
副楽長　山野弘実
〃　北川治史
相談役　中島誠治
楽員　森本忠善
〃　武内清明
〃　虫明立生
〃　岡﨑治喜
〃　森本実
〃　谷内秀自
〃　中村剛史
〃　藤井正仁
〃　藤井保人
〃　枝廣隆文

〃　掛谷宣和
〃　矢田哲一
〃　猪原啓介
〃　三代幸徳
〃　森川道弘
〃　三代拓己
〃　高橋徳行
〃　仙田勉
〃　仙田公男
〃　余村元
〃　渡邉泰造
〃　髙田一弘
〃　田中正之
〃　渡邉孝信
〃　森本孝志
〃　藤井成人
〃　原正彦
〃　北川茂久

会計部
部長　佐藤道孝
部員　上原志郎
〃　今川昌彦
〃　武内清明

庶務部
部長　上原繁道
副部長　岡﨑真一

〃　今川昌彦
部員　山野弘実
〃　武内清明
〃　岡﨑治喜
〃　藤井正仁
〃　枝廣隆文
〃　吉岡貞彦
〃　藤本芳久
〃　三代信行
〃　渡邉泰造
〃　髙田一弘
〃　友井道弘
〃　友井正人

・名簿・諸統計担当
岡﨑真一
今川昌彦
武内清明
友井道弘

・事情願書担当
上原繁道
枝廣隆文
三代信行
渡邉泰造

・法人実務担当
上原繁道
山野弘実
岡﨑治喜
藤井正仁

・デジタル推進担当
山野弘実
藤本芳久
髙田一弘
岡﨑邦夫

布教部
部長　田中隆之
副部長　虫明立生
〃　佐藤真孝
部員　山野弘実
〃　田林久嗣
〃　高木昭祥
〃　渡邉隆夫
〃　室悦子
〃　武内清和
〃　西迫宏哉
〃　鳥井利昭
〃　福島大介
〃　北川治史
〃　瀬藤友昭
〃　三代幸徳
〃　高橋徳行
〃　渡邉泰造
〃　藤本知加子

海外部
部長　上原志郎

副部長　吉岡誠一郎
部員　佐藤真孝
〃　上原順子
〃　上原千枝子
〃　北川壯一
〃　三代幸徳
〃　津森朋之
〃　武内敬教
〃　宮本正明
〃　鳥井悠加
〃　丸山隼人

史料部
部長　門脇元教
部員　上原繁道
〃　中村道德
〃　山野弘実
〃　虫明立生
〃　山田敏教
〃　淺野明教
〃　上原繁次
〃　三代温生
〃　上原喜三
〃　藤井正仁
〃　吉岡輝昭
〃　藤本芳久
〃　津森朋之
〃　友井道弘

〃　大月道昭

笠岡の道編纂委員会
委員　上原繁道
〃　門脇元教
〃　山野弘実
〃　上原繁次
〃　岡﨑治喜

管理部
部長　虫明立生
副部長　上原一始
〃　藤井正仁
部員　門脇元教
〃　今川昌彦
〃　山野弘実
〃　横山逸郎
〃　森本忠善
〃　中村義太郎
〃　赤木素志
〃　上原繁次
〃　岡﨑治喜
〃　武内清和
〃　中村剛史
〃　藤本晴司
〃　藤井保人
〃　掛谷善成
〃　掛谷宣和
〃　矢田哲一

〃　三嶋正教
〃　北川治史
〃　藤本芳久
〃　雑賀元生
〃　渡邉泰造
〃　丸山正人
〃　北川茂久

・防災・危険物・ボイラー
佐藤道孝
上原志郎
岡﨑治喜
上原一始

・電気管理責任者
桑田則昭

・車両管理
今川昌彦
上原一始

信者部
部長　上原愛美
副部長　今川佐智子
部員　上原順子
〃　岡﨑和美
〃　上原千枝子
〃　上原一始
〃　中村理恵
〃　上原美可

育成掛
主任　武内正美
掛員　上原繁道
〃　吉岡壽
〃　佐藤道孝
〃　門脇元教
〃　中村剛
〃　田中隆之
〃　中島誠治
〃　谷内伸自
〃　杉原博之
〃　三島渉
〃　横山逸郎
〃　森本忠善
〃　高木昭祥
〃　山田敏教
〃　赤木素志
〃　渡邉隆夫
〃　岡田誠
〃　内海安子
〃　門脇加津
〃　室悦子

詰所掛
主任　上原理一
副主任　上原澄雄
掛員　上原きよ
〃　上原喜三

かさおか編集掛

主任　山野弘実
副主任　虫明立生
掛員　岡﨑真一
〃　内海史郎
〃　上原繁次
〃　上原喜三
〃　藤井治喜
〃　吉岡輝昭
〃　瀬藤友昭
〃　本多正悟
〃　余村元
〃　村川久美子
〃　香取雅人
〃　時宗一実
〃　友井道弘

教養掛

主任　中島誠治
副主任　門脇元教
掛員　武内正美
〃　田中隆之
〃　吉岡誠一郎
〃　山野弘実
〃　森本忠善
〃　田林久嗣
〃　中村剛史

＊婦人会

支部長　上原きよ
常任委員　武内正美
〃　上原愛美
〃　上原順子
〃　岡﨑豊子
〃　門脇加津
〃　岡﨑和美
〃　吉岡八恵
〃　山野なつ
〃　田中つかさ
〃　中村理恵

＊青年会

委員長　上原明勇
副委員長　岡﨑治喜
〃　中村剛史
〃　三代幸徳
〃　上原喜三
〃　上原一始
〃　余村元
〃　田中正之
〃　重政理治
〃　森本直彦
〃　森本信彦
〃　中村元彦
〃　坂井幸生
〃　高木弘毅
〃　藤井成人
〃　枝廣正寛
〃　三嶋文昭
〃　瀬藤大喜
〃　丸山優樹
〃　丸山隼人
〃　河田裕也
〃　岡秀明
〃　高信雄也

少年会

＊団長　森本忠善
副団長　淺野明教
〃　藤井保人
委員　吉岡誠一郎
〃　岡﨑治喜
〃　谷内秀自
〃　中村剛史
〃　掛谷宣和
〃　三嶋正教
〃　吉岡貞彦
〃　猪原啓介
〃　雑賀元生
〃　三代拓己
〃　秀平元一
〃　上原宏恵
〃　佐藤和代
〃　藤本久美
〃　武内まさみ
〃　瀬藤三幸
〃　丸山哲子
〃　丸山智旬
〃　山田英嗣

＊学生担当委員会

委員長　上原繁次
副委員長　佐藤真孝
〃　杉原善朗
〃　髙田一弘
委員　淺野明教
〃　岡﨑治喜
〃　上原喜三
〃　上原一始
〃　藤本晴司
〃　貞清知実
〃　森川道弘
〃　本多正悟
〃　下田誠輝
〃　武内ゆり
〃　藤井成人
〃　掛谷喜代子
〃　北川茂久

◎第九七二期修養科一期講師

自 立教185年6月1日
至 立教185年8月27日

久松　中村剛史

七月月次祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます
親神天理王命の御前に 会長上原明勇 慎んで申し上げます
　親神様には一れつ子どもの陽気ぐらしを楽しみに 一人ひとりに身体をお貸し下さるばかりでなく 子ども可愛い親心を十分にお掛け下され 天然自然のお働きを通して陽気ぐらしが出来るようにと日夜変わる事なく御守護下さいます事は誠に有難く勿体ない極みでございます　私共はこのお借りしている身体を結構に使わせて頂ける事を 朝夕に御礼申し上げると共に 御恩報じの心でたすけ一条のご用の上に努め励ませて頂いております
　その中にも今日の吉日はお許し戴いた七月の御祭日でございますので 只今からおつとめ奉仕人一同 明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめさせて頂きます　御前には暑さ厳しき中をも厭わず今日の日を楽しみに寄り集いました道の子供達が 相共にお歌を唱和し日頃のご高恩に改めて御礼申し上げる状をご覧下さいまして 親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます
　さて子ども達の中には 早くも夏休みを迎えている子もいるようです　今年の夏休みは コロナ感染者が増加傾向にある中ですので 感染対策をしっかりとした上で 夏休みこどもひのきしんや笠岡団としての夏休みこどもおぢばがえり また久しぶりに開催される学生生徒修養会高校の部などが行われます　これらの行事を通して 道の子ども達に信仰の喜びを伝える事ができるように まず親が率先して範を示せるようにつとめ励ませて頂く所存でございます
　何卒親神様には旬々の理を生かし只ひたすらに成人の道を歩む皆の真実誠の心をお受け取り下さいまして 万たすけの上に尚も自由の御守護を賜り 親の背を見て育つ子ども達がよふぼくとなり 共にたすけ一条の歩みを進めてくれる子に育つようお導きの程を 一同と共に慎んでお願い申し上げます

立教百八十五年 七月月次祭 祭典役割表

祭主	大教会長様
扈者	今川昌彦
	上原浩

講話	武内清明

区分＼役割	地方				おつとめてをどり							笛	ちゃんぽん	拍子木	太鼓	すりがね	小鼓	琴	三味線	胡弓
坐り勤	吉岡壽	虫明立生	浅野明教	大教会長様	前会長様	上原繁道	大教会奥様	前奥様	田中ますみ	今川昌彦	中島誠治	上原志郎	中村剛	三島渉	中村義太郎	上原順子	今川佐智子	門脇加津
前半	佐藤道孝	今川昌彦	高木昭祥	田中隆之	上原浩	武内清明	武内正美	吉岡八恵	山野なつ	杉原善朗	赤木素志	虫明立生	山野弘実	吉岡誠一郎	内海史郎	内海安子	岡崎豊子	三島照美
後半	谷内伸自	山野弘実	岡田誠	岡崎真一	中村道徳	吉岡誠一郎	谷内美知子	中村初美	岡崎和美	岡崎治喜	渡邉隆夫	山田敏教	上原繁次	三代温生	佐藤真孝	森本冨美子	室悦子	上原千枝子

九月講話	上原志郎

賛者	内海史郎
	杉原善朗
指図方	上原繁道

陽だまり56

曼殊沙華

ビエン・J・K

秋の蒜山高原に行ってきた。「蒜山」は難読な地名の一つだろう。しかし2011年に姫路で開催された第6回B―1グランプリで「ひるぜん焼きそば」が金賞に輝き、一躍有名になった。B―1グランプリは「ご当地グルメでまちおこしの祭典！」を標榜している。したがって知名度が高まり観光客が増えることは本来の目的にも適い、とてもよいことだと思う。

ところが、私は最近までこの大会をB級グルメの日本一を決める商業主義的イベントのようなものと誤解しており、恥ずかしい限りである。だからというわけではないが「ひるぜん焼きそば」の幟を発見して、迷わずに道沿いの食堂に入った。店の人の応対もよく、濃厚味噌だれでやや太麺の焼きそばは、期待通りの美味しさだった。帰路、「曼珠沙華」とも呼ばれる彼岸花の群生があちこちに見られ、秋の景色を一段と引き立てていた。だが、蒜山では余りその姿を見かけなかった。まあ「死人花」とも呼ばれ有毒な彼岸花はモグラやねずみなどの侵入を防ぎ、畦を守ってくれるため人間にとっては有益であるが、牛や馬にとっては余り嬉しいものではないようだ。特に彼岸花の球根にはリコリンという毒が多く含まれ誤って食べると大変なことになる。しかし、すりおろして何日も流水にさらして毒抜きをすると、良質なでんぷんが取れ、飢饉の時の非常食として多くの人々の命をつないできた花でもある。つなぐということは切れかかっているものを引き止めておくことも意味する。だから決して安易な気持ちでできるものではない。私達は陽気ぐらしにむけて生命のバトンを親から子、子から孫へとつないでいる。だからこそ親神様から貸していただいている身体に感謝し、生命を大切にしなければならないのである。

さて、この「陽だまり語録」が今回で百回目を数える。連載を始めた頃は1年も続けば良いと思っていた。しかし「がんばり過ぎずにがんばる」をスタンスにしてここまで続けてこられたのは、たくさんの方々の暖かい応援のお陰である。これからもボチボチとつないでいく次第だが、百回目のお祝いは「まんず、酒」かな。

H28・12 陽だまり語録100 より著者転載

◎ブログ版「陽だまり語録」をご覧になりたい場合は、スマホやパソコン等で「陽だまり語録」と検索されるか、下記アドレスを入力してください。
https://hidamarigoroku-vjk.localinfo.jp/

6月から、毎週一回夕づとめ後、30代の未信仰男性がお話を聞きに教会に足を運んで下さっている。

その男性は仕事での事情から、信者Hさんに勧められ来られるようになった。最初は本人の心の内を聞かせていただいた後、かしもの・かりものの理などお取次ぎさせていただいたものの、教会長となって3年目の未熟な私は、どの様にこれから教理をお伝えすればよいのか悩んでいた。

7月の中頃、初席者をお連れする車内で信者Aさんにおつとめをお教えしてみては？ とアドバイスいただいた。真っ先に人間思案が出てきた。今まで順調にお話を聞いていただいたものの、おつとめとなると一歩ひいてしまわれるのではないだろうか。しかし、このタイミングでアドバイスいただいたのも、神様だと思い直し、早速おつとめの練習をさせていただこうと決めた。

おつとめの練習を始めてからある日、第二節の練習の途中で、信者Mさんが参拝に来られた。Mさんは毎月欠かさず参拝下さる方であるが、その日はなんだか勇めないまま教会に参拝に来たとの事だった。夕づとめ後だったのでもう教会は暗くなっているだろうかと思って参拝に来たら、夕づとめは終わったはずの時間にまだおつとめの声が聞こえる。会長と見ず知らずの男性がおつとめの練習をしていた。Mさんにとってその光景だけでものすごく勇ませていただいたと、満面の笑顔で帰って行かれた。まさに神様のお働きだと思わずにはおれなかった。

毎週一回の30分程度の未信仰男性への教理のお取次ぎ、Aさんからのアドバイスのタイミング、Mさんの月に一回の参拝のタイミング、これらが一つずれてもかなわなかった〝奇跡の勇み〟を体験させていただいた。（よ）